スバルの生活

櫻ガール

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
スバルの生活

【Ｎコード】
Ｎ５９３６Ｇ

【作者名】
櫻ガール

【あらすじ】
ムーやアンドロメダなどの敵がいなくなって平和な日々を過ごすスバルたちの生活。

4月の上旬

「おいスバル！いつまで寝てる気だ！」
「なんだよ～もう」
「なんだよ～、じゃねえ！今日はテメェの行く学校とやらの始業式だろ？」
「・・・・・あっ！まずいっ！また委員長たちにおこられる」
スバルはあわてて階段を駆け降りて学校へ行くしたくを済ませた。
「スバル、もうこんな時間だけど朝食食べられる？」
と、スバルの母あかねが言う。
「ごめん母さん僕新学期早々遅刻しそうだから今日は食べないよ」
スバルは急いで鞄をもって出て行った。
「ウォーロック、電波変換！」
「おう、任せとけ！」
「電波変換、星河スバル　オン・エア！」
そしてロックマンになってロックマン（スバル）は無事チャイムが鳴る前に席に着く着く事が出来た。
するとゴン太が興味深そうに話しているのが耳にとどいた。
「なぁなぁ、聞いたかキザマロ！あの有名人が転校してくるんだぜ！」
「知ってますよ！あのひとですからね！」

クラス中がざわざわしていた頃に担任の育田先生が教室に入ってきた。

「静かにしろー、では少し急だがここで転校生を紹介する。入ってきなさい。」

その転校生が教室に入ってくるとクラスは驚いた。
そして、その子はスバルもよく知っている人だった。

「響ミソラです。これからよろしくお願いします。」
「えー、響は都合のためここでみんなと勉強することになった。仲良くしろよ。」

スバルはおそるおそるとビジライザーを掛けてみるとハープはもうウォーロックと言い争いをしていた。

はぁ、何でいつもこうなるんだろ、とため息をつき内心で思った。

「では、響の席はと、ちょうどいいのでこれから席替えをして下さい」

先生の発言でクラスの男子のほとんどはミソラと同じ席になれるようにと祈っていた。
しかし、何かというとスバルはのんびりしていた。
するとゴン太が、

「おいスバル、おまえミソラちゃんの席と近くなりたくないのかよ？」

と、興味津津でスバルに聞いてきた。

「べつに、近くの席じゃなくても同じクラスなら話せるんだから。」

と、無表情で答えた。

実はこの時スバルはビジライザーを掛けてハープとウォーロックの言い争いを観ていたのだった。

「女子は終わったので次は男子が決めて下さい。」

教室でスバルはなるべく窓側で空が見える席にした。

スバルは何かというとほぼ適当に決めていたが、他の男子は違った。彼らはミソラちゃんが座りそうなところをめぐって争っていた。

「では男女とも選んだ席に座って下さい。」

「やっほ～スバルくん！」

ミソラは後ろのスバルの方を向いて言った。

スバルの目の前はミソラが座っていた。

ミソラの横はゴン太が、スバルの横にはツカサが座っていて、ミソラの前は委員長、委員長の横はキザマロが座っていた。

「ねぇウォーロック、少し静かにできないの？」

スバルは小声で言った。

「仕方ねーだろ！こいつがうるせぇんだから。」

ウォーロックは不機嫌そうに答えた。
ビジライザーでよく見ると二人は怒りのボルテージが目に見えるほどケンカがすごかった。

「これから朝の会を始めます。起立!、礼!」
とルナが威勢のいい声で号令をかける。
通常は授業に集中するスバルであったが、今日はウォーロックとハープの言い争う声を聞いていたので全く集中できなかった。
ちなみにこの日の一時間目は算数のテストであった。

＞問題＜

半径５ｃｍの円周と面積。

スバルの答

正解の答
式　面積　５ｘ５ｘ３．１４＝７５．５
（答え）７５．５ｃｍ２　　７８．５ｃｍ２
円周　１０ｘ３．１４＝３１．４
（答え）３１．４ｃｍ２

という風に答えを間違えてしまった。
テスト中ゴン太はテストではなくミソラの顔に集中していた。
テストが終わって休み時間になると、

「ゴン太、テストうまくできた？」
「お、おう上出来だったぜ！スバルはどうだったんだ？」
「ちょっとイマイチだった。」
スバルはウォーロックたちを横目で見ながら答えた。

4月の上旬（後書き）

これはジャックたちがいない物語です。（出てきません）

昼休み

スバルがため息をついてるとミソラがかけよってきた。

「ねぇスバル君！テストどうだった？私はあまり勉強して無かったからボツボツだったよ。」

「僕もどこかの誰かのせいでテスト、イマイチだったよ。」

またしても、スバルは横目でウォーロックの方を見ながらいった。ウォーロックはその視線に気づいたらしくスバルに怒鳴り散らした。

そして四時間目が終わると給食になった。

机を動かし班になるとゴン太が早速給食を取りに行ってしまった。

スバルの班はミソラ、ゴン太、ツカサ、スバルの四人だった。

「ねぇスバル君とツカサ君、今夜電波変換して夜の街を遊びに行かない？都会の方とか。」

「いいねそれ！僕は賛成。」

「じゃあ、僕ゴン太誘おうかな、一応オックス・ファイアになれるし」

ミソラ、ツカサ、スバルの順で言っていたのであった。

給食の時間になると勢いよく2分もしないうちに給食を完食するゴン太であったが、今日はどちらかというと食べるのが遅いスバルよ

りも遅く食べ終わった。

「ねぇゴン太、どうしたの？今日は給食をたべるのなんか遅くない？」

とスバルが怪しげに聞く。

「お、おう！実はこれ俺の一番嫌いな食い物なんだよ。ハ、ハハハ。」

「そ、そうなんだ、ハハハ・・・・」

（ゴン太、ミソラちゃんがいるから余計緊張してるんだな。）

とスバルは内心思った。

「ねーみんな、今夜どこ行く？ロッポンドーヒルズとか、シーサーアイランドとか、」

「お？何の話だそりゃ。」

「あ、言うの忘れてた。今夜電波変換して夜の街にあそびにいくんだ。」

「俺はどこでもいいぜ。」

「じゃあ、ツカサ君はどこがいい？」

「やっぱり僕はロッポンドーヒルズがいいな。あの高い所から見える夜景がいいんだ。」

「じゃあ、スバル君は？」

「僕もツカサ君と同じでいいよ。」

「じゃあ、私もロッポンドーヒルズ！いいよねゴン太君？」

「あ、ああ良いぜそこでも」

「じゃあ、決まり！」

と給食の時間は終わって昼休みになった。
ミソラちゃんを見に他のクラスの子も見に来て握手会やサイン会なども勝手に開いていた。

無事に終わったころ。

「スバル君！やっと終わったよ！」

「うん、お疲れ様！」

ミソラは手をブラブラさせていた。よく見ると腫れていた。

「ミソラちゃん大丈夫？手腫れてるよ？」

「あ～これ？慣れてるからいいの。」

「よくないよ。保健室にいこ！」

手は痛いので、スバルはミソラの手首を弱い力で握って連れて行った。

ガラリ・・・

「失礼します！ミソラちゃんじゃないや、響さんが鉄棒をしていたら手が腫れちゃったんですけど。」

ミソラの代わりにスバルがいった。

「スバル君もたくましいわね～。ミソラのために。アナタも少しは見習ったらロック？」

「うるせぇ」

「まぁ怖い」

それから暫くハープ達はあーだこーだと言い争っていた。

「じゃ、僕先に戻ってるね。」

と言ったあとにミソラがスバルの手を掴んだ。

「ん？」

「あのさ、待っててくれない？」

「いいよ。」

昼休み（後書き）

サブタイトルを変えました。
評価お願いします！

午後

「はい、手当が終わりましたよ。」

「ありがとうございました。」

「じゃあ、学年とクラスと名前をこれに書いてね。」

そして、ミソラはチャートを渡されて言われたとおりに書いた。

「この学校の保健の先生ってやさしいね。」

「うん、まぁ、ふつうだと思うけど」

二人は廊下を歩きながらいろんなことを話した。

ガラリ・・・

「みんなただいまー！」

ミソラはクラスに向かって言うと

「ミソラちゃん手大丈夫？」

などと言ってクラスは心配していた。

「お帰りスバル君。」

「ただいまツカサ君、」

「どうだった？」

「？何が？」

「廊下歩いてると振り向かれなかった？」

「え？ああ、うん。大丈夫だったよ。」

「あ、そうだ。今夜ロッポンドーヒルズに行くの何時頃がいいと思う？」

「う～ん。なるべく遅い時間がいいかも。」

「じゃあ、夜の１２時にしない？」

スバルはしばらく悩んだ結果・・・

「いいかもね！」

すると、ミソラが帰ってきた。

「ただいまぁ～。何の話してたの？。」

スバルの代わりにツカサが答えた。

「今夜行く時刻を決めてたんだ。」
「ふ～ん、それで何時になったの？」
今度はスバルが答えた。
「夜の１２時だよ。」
「オッケー！」
「でも、ゴン太君起きてられるかな？」
「じゃあさ、今日ぼくの家でお泊り会やらない？明日休日だし。」
ここでスバルが案をだした。
「いいね。僕は賛成。」
「私もオッケーだよ。」
「ねぇロック、スバル君前はあんなにしゃべらなかったわよね？」
「うるせぇな！おれには人間の発育には興味ねぇんだよ！」

「私はロックの発育に興味があるんだけど。」

ロックはハープの言った意味が分かったらしく激怒した。

～放課後～

「じゃ、今日五時に僕の家に集合っていうことで良いよね？」

「了解。」

「オッケーです！」

最後にミソラがドラマでよく出てくるような人物に口調を似せてみて言った。

午後（後書き）

アドバイス下さい！
くれないとかけないので・・・

帰宅

「ただいま。」

「おかえりなさい、スバル。」

「あのさ。今日ミソラちゃんとツカサ君とゴン太が泊まりに来るんだけど。いい？」

「ええ、大歓迎よ。珍しいわねスバルがお友達を呼ぶなんて。」

「ああ、うん。そうだね。（本当はただの成り行きだけど）」

ガチャ・・・

スバルは自分専用の物置から昔、男とは思えないほど大事にしていた掃除機を引っ張り出した。

「よっこらせっと。」

「あん？なんだそれ新しいトレーニングマシンか？」

「あのね～そんなことないから。」

「これは掃除機って言って、手に取りにくいゴミを吸い込んでくれる機械なんだよ。」

「そんなのＦＭ星には無かったけどな。」

／／／／／／／／
（あるわけないでしょ。あったらこっちがおどろくよ！）
と内心で思うスバルであった。
ウィ～ン
「おお！すごいや。」
スイッチを入れてみると早速たくさん吸い込んでいる。
～15分経過～
「ふぅ～終わった。」
「何で急に掃除なんかするんだよ？」
「そりゃ～皆が来て汚い部屋なんか見せられないからね。」
スバルはすることが無くなったのでリビングに行った。
「母さん。今日のおやつって何？」
「あぁ～、ハイハイ。今から作るわ。みんなが来てから食べなさい。」
「うん。」
スバルはすわり心地のいいソファに座ってテレビを見始めた。

番組はやはり宇宙の内容だ。
スバルの見る宇宙関連のドキュメンタリー番組は大人でも見る人が少ない番組だ。

＜五時頃＞

ピンポーン

ガチャ

「やぁスバル君。」

「やっほ～スバル君！」

「おうスバル、約束通り来たぜ。」

「やあ皆。上がってよ。」

「ボクスバル君の家に来るの初めてだな～」

「お邪魔しま～す！」

「邪魔するぜ！」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5936g/

スバルの生活

2010年10月11日17時27分発行